



横井孫右衛門藏書



十訓抄中

第五可撰朋友事

第六可存忠直事

第七可專思事

第五可撰朋友事

或人云人老善友よあるん事とらん祿よへんや
麻のちりの蓬はさきふらふ自らちとさく人あり
蓬は枝よりちるぬ草おちさきふらふ麻はまき
すけのちりゆらちりへん道のちりまきふらふ
すけのちりゆらちりへん道のちりまきふらふ



ありくうりあり人の中よまのぬれはさる
あまきとさうりけいよ自しあしき心けり信
能友よありん事経よ説きよすめきと顔
氏の家訓子ハ

與善人指如芝蘭之室久而自芳也
子思人指如鮑魚之肆久而自臭也

と云ふ又或文よ人の心ハ氷の入物は随うあし入お
月もあれば影をそし月なれば影あくし心ハ朋友
あし何と不可撰と書つと又九条殿遺誡よ高
色恵むれ人よ信よ事あくれと教へ給るりぬれん

カ形くうらめしう心友あり共よく其人と撰會し
董猶照と具よすなりと也花乃りしよまを斗とら
三日月の赤よ一夜はつとる友よとも信あつとる
日すまめしと思おつるも也すまよく友あつとる
よハ臨る心かなり徳とす好し心ありし人よ石
伴芝潤よ信し人の森竹林よ篋し七賢類よと
かありし友ありけの子歎ハ雪乃る月よあくれ
て遙よ剡縣の安道と尋孫劉真ハ清川朗月よ香
度乃るさよ半江恨とける滅よ子あつとる形
よハの形も此事あしおしきめされしを梁の孝

正鄰校と申すは二の長と申すは六の老翁の遊を
すめ給ふの仲尼の子路と云ふはありては子路の
をくれと申すはあはれけりては子路の
法和才九の皇子貞真親王の作はるけり

鄰校散後平臺靜あり 空遣春風只斷腸ラ

文選第二十一魏文帝子吳質書云

昔伯牙絶弦於鐘期仲尼覆醢於子路知音之

難遇傷門人之無逮也

○河原嵯峨才七甲大長亡靈延長八年之頃寛平法皇の宮人

託して我在世の時殺せを事すゆふよふとて若然を

受らゆふまをれハ法皇初言もよく其をめよ七ケもよ

して訛誦と被彼事あり神願文紀在昌長谷雄孫作けり

朕昔為握符之尊卿亦為和義之佐合體之

儀重於曩時滅罪之謀須迫於今日

○村上帝延喜抄かれさせ給ては村把大納言代明親王子延喜孫延光朝夕之戀忠

子とくはかこ人の色を一せぬき給りたりき或衆の友

弟製給りせしまけり

月輪日本雖相別温意清凉昔至誠

兜率寂高歸内院ス如今於彼語卿名

大納言夢覺て驚て是を知し

再拜^{スル} 聖顏^ヲ 一寢程^ト 息言^ハ 芳魂^ヲ 奏中情^ヲ
夢^ニ 中如^シ 覺夢^中 事雖^ニ 盡^ス 一生^ヲ 豈^ハ 早^ク 驚^キ
後小野小町^ノ 奇思^ハ あり

思^ハ 川^ノ ぬま^ニ たる^人 の^心 づ^く 人^友 と^多 世^ハ 公^ニ あり^を
後末上庄の事

◎ 後三条院東宮^ノ 御^ニ あり^し け^ハ 術^ヲ 学^ビ 士^實 以^テ 報^シ 臣^任 國^ニ
子^ニ 綴^リ け^ル 子^ノ 儀^別 の^名 抄^情 世^ヲ 終^ス け^ル

刈^ハ 民^ノ 縦^作 可^レ 棠^詠 詠^ラ 莫^レ 忘^ル 多^キ 年^ノ 風^月 遊^ビ

此意ハ毛詩云孔子曰日暮莫伐邵伯之躬宿也といふ事也
又^ハ 内^ノ 事^ナ 也

い^ハ ず^も ず^も 人^ノ 心^ヲ 知^ル べ^シ 月^ノ 光^ヲ 見^ル べ^シ 日^ノ 影^ヲ 見^ル べ^シ 人^ノ 心^ヲ 知^ル べ^シ

若^シ 夫^レ 大^ニ 心^ヲ 知^ル べ^シ 母^ノ 志^ヲ 乃^チ 知^ル べ^シ 陰^ノ 方^ヲ 思^フ け^ル 六^ノ 朋^友 友^小
ひ^ハ ず^も ず^も

◎ 楞嚴院の惠心僧都子園城寺慶祚阿闍梨^ヲ 遷化^ス 可^レ 告^ス 中^ニ 契^ス 之^ノ 年月^ヲ 送^リ け^ル 子^ノ 志^ヲ 祚^後 軌^ノ 行^ハ 人^ノ 心^ヲ 知^ル べ^シ 縁^ノ 子^ノ 心^ヲ 同^ク 伽^ヲ 依^テ 終^ス 同^ク 子^ノ 志^ヲ 乃^チ 知^ル べ^シ 白^ハ あり^て
出^リ け^ル 色^ノ 也

我^ハ 是^レ 極^ニ 樂^ニ 久^ク 住^ス 菩^薩 化^縁 已^ニ 盡^テ 還^ス 生^ス 極^ニ 樂^ニ
と^中 の^心 あり^て 貴^ク 忽^チ 子^ノ 横^川 僧^都 の^心 あり^て
素^心 一^ニ あり^て 使^ハ ゆ^り 僧^都 此^ノ 曉^ヲ 矣^子 終^ス 子^ノ 心^ヲ あり^て

◎ 興福寺の智光賴光ハ一雙の貴人として一可^レ 子^ノ 心^ヲ あり^て

てんごめりう頼光前より光光其は羽と刀人
形く夢中子極系子系て頼光の光光くせきりる
と刀のゆりさして其様を信書とてハ智光の昇地
羅として世に傳へたり

六 中山太郎とよのけの人宰相成頼と保て常にお供
友かりけり宰相係は道心終してお家として馬野
菴居りしときよりけり変かぶみ記を其く云者のわ
心ゆりさして使して其家の表とて云りはまよてめ
栢の清巻とてりくせきりりて中山のこのお供
の山とてんごめりう頼光前より光光其は羽と刀人

あしとてりこの信頼けり宰相入道の許へり
てり人この事とて云やとてりりるれいあやとてり
こをりりよはせり事へかくて是末とて刀をりれとてり
とてりりるのり障子のとてりりるれいあやとてり
りゆり其ゆを入道とてりりるれいあやとてり
けり山のきりすまひらりりりりりりりりりりり
宰相よりんとしてとてりりりりりりりりりりりり
とてりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

七 仰牙鐘子期とてりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
とてりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

ひさしりきりさきよしる文選の文はま也

元稹と楽天との詩の友としてあつたやうに元稹もその如くかなつたやうに楽天も其作をうらやまふ詩人と三才を

集て唐の大教院の経苑を筆をうけける遺文三十軸軸々金玉竜門原上土埋骨不埋名と云ふれを

わきまをある也
楽天又或文の友よりせしむる詩を云

交情鄭重金相似タリ詩韻清鏘玉不如

誠は徳友の交何よりも面白く人々院家の南水の垣
とも不臨貪とも私らうし何事と契けん孟母の子を

思ひ人は隣と云なすて之げらも友をえし心是まことや
らうと云ふは付て断金成木のちきりも也わと云事あれた
人留はつけら上よこくと云れは云事す山鳥の鏡は向て
わき鷹の行をかりてそよ留友を思心也依保の河東の
務の中よ友をとりせらふあるの云事わきと云すこと
中の中よ入らふの波のうらやまづらぬをのうらやま
下よまうし思ひやと云そやと云也友のわきよ母の
あよこまひりぬるの海の清く連友とす人すか
り々ち事海の八橋志とすりぬれと云れす思ひや
て心月を柳妹せのわきよ八橋危月元のゆかり

只うらわら友よいあすへもあはれ書をいしむらよはと
箱いあをいさへぬへし治まよはらあおれはらうし人
かすし心をえぬへしぬり唐の梁伯鸞の妻孟光を
形極めてカクくうりけまて母史子はく人陰道二心ぬ
りりり史世と道きて霸陵山は入ける時よもつて陰を
家の貧をいあなつて婦の礼までいわんてあかり
しりて志深うりりり誠よ其妾西施南威をうつせりえ
史をうりめ外心あへんぬりてあはれぬらうし何の言
かあへん秦中吟と云よ

富家女易嫁 ハレカシ 嫁早軽其史 スルヲケハニス

貧家女難嫁 カシ 嫁晚孝於姑 スルヲケトヒ
那とあはれいししく便をいすく史のそらちかかるとぬ
む女よりぬくしとす人々書を定る半法令のそへ
あり

桓武天皇三子 淳和帝の清代は夏野大長孫とく律令をぬきと定る
右大臣四位後小倉王の子
りし時男女は振舞と分ちるとのりりり内は書を不共ら
三門可去道七あり其三と云へつは男の父母ははらう余
絶る時史誌たりし愁る色悲りめ女はは貧賤の時はへ随る
女富貴ては不可也と云よ史父母はら時得女と云ふ父母
死ては不云不ぬと云ふ返るぬと云ふ也其七と云は

思の父母のつめは横ぢの妻二は同史一と云る妻三は心
こつと妻四は物縁と云する妻五は盗する妻六は
多けり妻七は未強ん事と可憐故也七は悪く病あり
妻也此七の夫あらん女は近づくる事す但妻子はけ
そら外はあらず又悪くも片を不撻片又老を可
撻と云事あれは女はよく男と云く故と云あつれを
故は白居易の井の底の瓶のこく人と云く少人の露
女ついでて成をりてうつくしくゆりすらと云れと
云と云れ長谷雄御の貧女吟と作く男を撻んんよん
心よらんよ人をかへるこゝろあれと教へ給り中にもあ
ましくんもあましくいづくはくはくはく

紀相絶子

九 大和物語の昔大和言のりけり人のこころはまじりんと
かいつきけり女を肉合人なりとのころそこらけりし
いはかりあつこの部あつたよりの何れをむすもて任せ
る男あけりそりけるまじりもあつた井よりそら
やうしてあつたよるこころあつた成はける影をえ
ちて

淡山野もあつたあつた井のあつた人をあつたあつ
とあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
やう

寛和^{寛和院}母宮野宮ありけり工役滝^{平太史教の旨}は平教光と云

とけりあつたふと云はれて群り又たつくすられ給あり

其より野宮の工役ありまけり

十^{此泉院才三子}三条院^{帝子の親王}白女^{伴周子}母宮も道雅三^{伴周子}位^{伴周子}あり給て世人

知程よりありあられ給りてあつた給り三^{伴周子}位^{伴周子}御内

大臣の子なり給れぬ教はあつた給りてあつた給り

あつた給りてあつた給りてあつた給りてあつた給り

あつた給りてあつた給りてあつた給りてあつた給り

あつた給りてあつた給りてあつた給りてあつた給り

今なき思ふてあつた給りてあつた給りてあつた給り

まじすきいものをあつた給りてあつた給りてあつた給り

すこれ大和^{大和院}和^{和院}院^{和院}は武^{武院}院^{武院}の^{武院}女

房^{房院}あり給りてあつた給りてあつた給りてあつた給り

あま^{あま院}に^{あま院}け^{あま院}り^{あま院}て^{あま院}あ^{あま院}つ^{あま院}た^{あま院}ま^{あま院}か^{あま院}り^{あま院}思^{あま院}ふ^{あま院}り^{あま院}を^{あま院}け^{あま院}

るを平中^{平中院}あり給りてあつた給りてあつた給りてあつた給り

すよつ^{すよつ院}り^{すよつ院}あ^{すよつ院}れ^{すよつ院}は^{すよつ院}な^{すよつ院}も^{すよつ院}き^{すよつ院}け^{すよつ院}る^{すよつ院}を^{すよつ院}ら^{すよつ院}あ^{すよつ院}つ^{すよつ院}は^{すよつ院}あ^{すよつ院}つ^{すよつ院}給^{すよつ院}り

中^{中院}一人^{一人院}あり給りてあつた給りてあつた給りてあつた給り

使人^{使人院}の^{使人院}あ^{使人院}つ^{使人院}を^{使人院}あ^{使人院}つ^{使人院}て^{使人院}い^{使人院}ふ^{使人院}う^{使人院}り^{使人院}も^{使人院}あ^{使人院}つ^{使人院}ま^{使人院}つ^{使人院}は^{使人院}あ^{使人院}つ^{使人院}ま^{使人院}つ^{使人院}り

て^{中院}あ^{中院}つ^{中院}ま^{中院}つ^{中院}の^{中院}あ^{中院}つ^{中院}れ^{中院}を^{中院}あ^{中院}つ^{中院}て^{中院}あ^{中院}つ^{中院}ま^{中院}つ^{中院}の^{中院}あ^{中院}つ^{中院}り^{中院}あ^{中院}つ^{中院}ま^{中院}つ^{中院}り

此^{中院}事^{中院}を^{中院}く^{中院}て^{中院}あ^{中院}つ^{中院}ま^{中院}つ^{中院}り^{中院}け^{中院}り

あまの川をたづねて中をよみては目のかげの深きあり
あまの女はよきすこきなりけり成のやうなをよみて
すくなく父母の申ははくも世にあらざりて事なり
よも悔しき方あるなりとぞ

⑤ 唐國の齊國王の后は名瘤とてく賸民の娘也野は
行て素を取けつを王持は出せ給けるは素のこと
りてまの行者と目せよんなりあれはあやとて故に
同給は我々の命はよりて素と取くつ也行者は
とんたつと事なはるしよあすすこやあつたあも
きくものよあすくと急給く息よりてらん給けれん

家よめて又母は此中をりてゆつたれを義とほ宣ふは
とりあつたけいしき心そそよりあやしきつては
ろ成りて右と成りたり

イナ子瘤の額よととれは宿瘤と云けり

⑥ 卓王孫^{タク}の娘は卓文君と申す一人家富きれなりけり
る根をとりけり上姿人よすくまをりたり員は幸山
とつて胸は玉とてみけり時子同馬相如と云けり男成
た貪りりもれた女とてり琴をよみてのききりて若
是よりては男はあつたけりを父母とてしき大仲りれを
相めり貪家はりて世をわつる月又文君のけりを志す

アけるに^しは相如終^るせよ仕^へく文周令と成てい^ふ
うりもれい父娘の世をゆるしてたり是又すきの道あれ
て一筋子難定惟喬親王穂^ノ彈琴詩云

相如昔^レ拙^ニ文君侍^リ

莫^レ使^レ蘆^ノ中^ニ子綯^キ穂^カ

或文云妻の蘇也云心の上と入る下庶人よむるまて又
の心よひと一こう故也昔心若背く時ハ家亡と云ふは
老妻史の中ハ悪事との去りつゝの古事平といふはす
め此世よの家を治る徳と不亂後世ハ道をするむら
善念識ちる人

吉唐子陶谷子と云者るまゆり一二年の内よ家たふ^る富

内人より其妻をうらむをいふきて泣悲あり姑夫ふ
怒く此と富よ妻あきて云家閑能^シ云て官あつを嬰^イ
咏^クと一切を^シて富りを積^シ映^シと云林三の令事叔数家貧
して國富り^し福子孫よ継名と後代よあつ^き
令言子よ能^ク云切^して富業^{する}事^後富を^出る是
ころ富^し我中^に南山子^云約あり七月雨露^はわくねく
をの衣も志^れん^事を惜てあ^く食物^を求る心忘
きり此^{あり}や^指形^し害^をのる^た馬^よむ^りそ^ハ倫
子食物^のと思^ふ子^害と^得也^此帛^言子^ハ似^{たり}
是^{あり}子^たく^と言^ける^言子^遠子^害よ^あひ^まり

お松の妻に付く人男のきなり

法和帝文種寺三子のれを給く東宮侍も不こい悲ひ給こ

と限か一月日さおりのりよ付く首を忠給おき
乃こ此神よりくまあてせんわおきまうた胡
夕通し心文大を入をくれさる箱の百合もあより
そらとあげく人なを給よ付くも清心の恵おわく
急くさせおれハ平井の烟とわん半もむけよふ
しこて此を給帝さすせく多の大小乗經と書
供養口しきさり其山禎文橋贈納言廣相は給書
おれは作より糸く清神をわんもち子料紙の色忠

ゆふのそのおすておよの松よあころあるを刀くこの
此經ハ結帝しあす色紙しあすいおる松乃
侍らうさるせハはるあるとくわいその給よぬを
強よけらおりのこの地くおよせくまつてまの
ひあぬ侍もきまて實よおと給作あれん
此意とや此形文子のせくさきと恐れおくしあれん
お事おり震筆と給わわセるも憚也と給作え
えサハつそつほのめうさきむとして

同心契寢蓮花偈 匪石詞入鏡字門
書へくれをくせん是よりそん古紙の世よん

しきりしきり

醍醐帝法隆寺子の御事法隆寺子を記して行くる事とけらるる事とけの目

藏ミナト上人善宰相房氏吉承平四年三月月二十日より等の宮より巻て

ひひける月より八月一日年割平子松苑一終て同三

日よりよりよりあつりける事同夢よりあつりて現

しあつりて金剛藏王の善巧方便とて三思より

足ぬ事よりく經よりけりける事より帝の御事より

れりより口の鐵山より相より事より各より五より計より其中

よりの茅屋あり帝是よりより上人を御事

て收ひて迎く招きて我日本國金剛尊大王

の事也然而在位の時五乃の重累あり此二宗ハ菅原の大臣の

事よりよりより故ニ此鐵室の昔本は落くのる若古執を

受事年久くよりあつりて被作りしく以成たす

り終つて善根の根をハ主と國母より可りとを佛云

傳へる事あり三長者より帝之の上よりくわる事也後

日帝計ハ佛教を入れし事也の事との事也との事也との事也

名悲泣鳴咽一終事のめなす上人ハ時畏

生給ふれハ眞運ハ貴賤と不論運の事と主

とす石可教とを帝作られる事也上人漢を流し

て彼屋の外へあれの山一ハ波よりよりより高岳

平城山子

真親と号す
親王の

いふ所々々々々の處よりおれせらるる事なり

どうも給ふやうに十善万葉の事おきこもあくと

さしあつたおひのあしはくとよく此中と奏しえられた

程子白太后其の御旨をさしあつて後世を勸む

りせ給ふ此未後世まで清志深ぬ也

⑤安房天皇の御弟の大草香の白皇子の家室宮岩津

すらん給ふ中守給ふ使まつりてこりせ給けり

領物を被りたり使すらん白皇子は意趣ありあり

けん是を失ひすしむいふは情給ふことなりけり

まに帝兵を遣して白皇子と許て其室をぬてあは

よし給けり月とよあつてくはまこの眉輪王のてあ

大草香玉皇子

教害せしま給ふたりはせらるるのすあはあは給ふ

あつたりしとく思縁は契と結ひ給ふちりし帝

の所成しをはせらるる答はあは給ふことなりけり

此太宗の心け給ふる女を小に契れら上育らして魏徽

いふのりあはれはりすししては給ふけり情はあは給ふ

桓武カ一

まり奈良の先帝世をこり給ふはあ意をこりけ

すしてあつてお家より及給ふるの尚侍薬子のすあふ

中にも崇徳院の八重の志やしましてはすらん給ふ

犯すやとるを黄雀又蟠螭とのとちかく捨の末
おまらるを引く童子犯とすりとのとるを童子又黄
雀とのとるを深谷後子据株のあり事を
不知して成とあやまてり此皆前子利をるにか
りとの後の害とる願也とせり王此時を
と用く晋と責とる事留給ぬ但周文と殷討を
おむるを義とあやまてり國へ向給時執行の
二子三子理と立て諫とすりといふ呂望とす
ひよけくすり給りき是は討の心おられり
とわく國是をむむく同天授人との時ある後
害の限ある也

⑤ 晋文公の文獻公のつれあひをわく他國へ移す給け
る小建中より七疲外て行歩よ及るより女子
推此とすすもく股の肉と切て供するよありて力
付く通道て後不遊よ獻公の泣をほりあり

⑥ 漢馮昭儀フシヤウキは元帝の時耐の官女也園よこめく飼給
げり然とせられて帝の時座らうくすこりわりけ
るよ昭儀是をよせり成と知るりもれは然と
すりもりけるをた右より人来ておくより帝昭
儀よをを同給家守猛獸ハ人を得くすくす

これら程にせむれたる皆に乃助よりわらひすべく忠臣
と云者君のまゝ名を惜む命をおしませぬ也

漢武の麒麟園の功也塞垣よりまて十九年
逐て漢の節と失くす鄭泉の爲孫園の使者也胡
地へまて三千里更に阜平張繡せりき焚於朝
の荆刺子鵠を備へ紀信の沛公の成りまてりける
成の恩のまよつりれ命の義よりて程といひ是迄
③ 孝仁天皇の時但馬守と云人常世の國へつりりける
り其終り帝失給くあり伊子景行天皇の位より始
年ゆまれりける持く系する九種の香菓と下の如と

先皇の清廟よりつて清涼して云命と天より受て
遠く瀛水と傳ひ性来の間十年と云て今天皇崩
して又命する事とゆくと獨りつとては何の益
かあらん天より作らさげのく自らつたて成り帝
群たより作らば墓を孝仁の後の例はつせ程まてりける
軍の中より君のまゝ命をすつて類は世のつひよまか
まてりる例は稀也唐より云の懿公よりける心はこ
ろくありませして賢と下りたるとの賞へ給て
程とのまてりて行幸の折は同樂のまてり幸へ給
けるよゑいとこのまてり國を亡す時程君の怒りと退くへ

を著くもむく人ぬりまれの心と聽かをこりて三か
くひて其肝をくわと去の上よのうしてゆりまおれと聽
公の片弘深と云人たよ私己の腹と云うとく若く肝と入
て死す主死を府に死すよと世人云けり廿人よして
高位を踏平と極く鴨斬り兼事と云ふ此心をけ
るよわかれの誠とけりよとつとくまぬへし此のまき
き白子を位付極くはせろ恨もなきよまきよは余
らて別思切く息よ命までとすてもん事其類をか
き

●延喜法代は貫之以下四人の奇仙は作く古今集と撰

れそた又新撰集と撰ひよりへし中貫之一人編言を
ちりてきりけりかひまきとくひをのりぬけりよ延喜八
年二月よ去たけけり趣く兼平五年上洛の時帝先
まき崩沛の万件序云貫之秩羅歸日將以上歌橋山
乃晚松愁雲之影已結湘濱秋行悲風之色息幽傳初
之納言息以薨逝ス

どうけりも彼但毛理う心の中よまきとくまきとけりた道
せよとよまきとくし程よ古の人の心と思とるか深りけり
●良峯宗貞は深草天白の近は也若人頭よ成よけり
時清門よをくれりりまきとくれいやくを頭ありしとまりいり

くたけくたけのありきさうりてらせらうと書あはりあは
りあれたあうれす清水とていふ所はあつめあつめとく
趣よりあつて次乃年清門の清とての日はあつて
殿上人元清服ぬんとて河原におきりけりあ
とあ人のた乃衣も成ぬ世苦の衣よあんきさうよ
とさみく木の葉も書くあやうきさうりて
とせさうりけりあてかたは良女おのりよあつて
いつて使をさうりよあつてさうりけりあつて
僧正も成く花山僧正遍昭とて云けり

④ 楷良利の寛平法皇の世を道基の女孫の回家とて寛

道大徳とて修行の四徳よけり和泉國日根とて云
よけり

あつてのさひ糸の髪よとてあつての恨やうとて糸
圓融院法皇の世をさうりて紫野の葬送とけりよ
些あつて子日せは給へ事なき思おて行成はかく
よけり

をさうりては糸の清幸の息とて標よりの後をさ
お家よとていふあつて思入とて心とて源とて

⑤ 花山院の時中納言義懐の外戚権左中将惟成の近
たよとてさうりて天下の権とてさうりて

上内裏と申花山は幸す申と申とて女人進く事よの
下は帝已に比立するに惟成申す事とて又義懐か
清く云外戚として重くおろしつるは外人とわけて
とて又よ世よ交らん事とて早くお家する事
一と義懐此中とねとて同お家する人の教訓とて
とてんいごとと何の人思ふけりて始終あつて
飯室よ侍てよ申れける

又一人よすれのおはしははらりてとてとてとて
惟成はよ頼み奉る目よとて川のおとく二条大路とてとて
けりてとてと此帝世とて若くせ給よとてりて表よとて

小野宮女の内女は徽敷女侍としてけりてせ給けりて限
くは志深りけりてよとてれを給ては款あつてとてよの
かろ心はそくおろしとては栗田用白のきとて殿上人とて
人并おとりけりてとてや扇よ

妻子称寤及王位 臨命終時不隨者

云文と書てりてとてとてりけりてとてとてとてとて心
おろしてけりてとて世は夢切のやとて也國のこつとて王の位
とてとてと思食おと息十善の王位を捨てて一葉并
の道よのせ給けりてとてとて内裏とておはせ給あつて
昔元和二年六月廿三日のけりては明月のふりて

了あらはらむといふことには心持はあはれぬに思はれり
すゝむ世経りのありし村平月よりのありしをあれは我願
既よ満ぬて貞觀敎のころまことありしをせ給あり
る事ありしを後妻戸といふ所付し世はよりしとて西宮
殿の清修行ありし間一はまよとてつれづれにありしと
契りしとて其業しは供せし世経よりあれ共はし
わらりありし割法皇の清事あるはなす月の中よ
三位中納言ありしはわらむより二心ありしとて
さへありし事ありしとて世人よりある長徳元年南
白も成給しといふ共はしわらむより世経よりありし
白も成給しといふ共はしわらむより世経よりありし

◎中納言顯基卿の後一條院よりありしはわらむより
に官位よ付て恨ありあり帝よとくれはしとて
忠臣の二君よはくすといふとて天名標嚴院よよとくれ
おろしてより帝よこれ給よりありし事ありしとて
あれはわらむよりありしとて敎司新王の清事とて
ひとて不系中よりありしはわらむよりありしとて
人若くより道心をとて常よりありしとて

古墓何世人の
不知姓よ名
化鳥結清也
年春草生

とてはつと終げりたふ、東に院、
るよりしりあ

世にすく家をか、成あれた程、
はよの上醍醐は任てけり、
時此人、
もくはし、
もれと作し、
すくはし、

信のあやまりもれと作し、
はらせし、
大原は、
兼少、
手終く、
者よ、
あは、
まよ、
きり、
ゆを

了と云はむなりてまゝ かねて善心いふなり

美濃大納言と其人のよし也

一条院三子内母上东门院の堂女

⑤ 後朱雀天皇の御心成事よありせりしきして位と云

宮よりゆつりよらる後三条院を東宮よきと給り
宇治原より二所の清事と作置せ給けりよ帝の
御事よ畏りしと給り東宮の御事被作付は
延りしと給りし受の色よありしあり此宮を
御事愚かりきよありぬ心とて志よしりへり

ころゆ也

出ても内院の相信子兼家云云男

藤原相公の御心成事よけりを記して

めりしとせしむりもれ

夢よりしとみよあききぬる給はぬりしと給けり

とてしとみよあききぬる給はぬりしと給けり

りしとみよあききぬる給はぬりしと給けり

後とすと給きし志を給はぬりしと給けり

⑥ 世官家昌泰三年九月十日の宴よ三位の右大臣の大

将少く内よのせけり

君苗春秋に漸老 恩を涯岸報猶遲

とつらとせ給れん敬感の約つらとせ給れん

つらとせ給れん敬感の約つらとせ給れん

去事も實子依く候。去事於師よりうたはれ
し。ふりて入り世にうりてく。清静も清りけ
り。猶君臣の礼にまじりてく。奥水の契も悲ひす
や。昔もせ給も人都のや。いとては清衣とらひ成
よろへ。清きよりありて。治の年。同日のく。う。誅せ
はせ給けり。

去年、今夜侍清涼。秋思詩篇獨斷腸。

恩賜御衣今在此。捧持毎日絲餘香。

源氏中おすもの。清きまらりけり。比八月十五夜の月お
心をすま。て。上。の。清。極。と。是。く。上。の。清。極。と。

清くも思おし給く

又、清くも思おし給く。は。日。の。清。く。思。お。し。給。く。
と。け。り。の。く。此。詩。の。一。句。を。誦。して。入。給。ぬ。の。の。物。清。く。お
け。り。と。お。り。け。り。は。く。と。清。家。の。清。遠。り。あ。り。
ひ。と。て。去。の。年。昌。泰。三。年。の。十。月。は。善。相。公。清。り。の
の。文。章。博。き。と。お。り。け。り。附。は。清。き。を。と。る。と。勅。
給。く。先。見。の。あ。り。け。り。事。を。つ。け。ま。せ。と。ま。り。給。け。り。
奉。と。と。懸。萬。事。思。ま。わ。り。け。り。賢。臣。の。と。ま。り。給。け。り。
達。り。お。り。ま。り。給。け。り。の。詞。よ。と。

誰れか之明不能親體と云。善相公之能不知。善相公

このまゝなりし事と相月の詔奏より
つゞく罪を承り事有しりまふありたり
應神天皇八年夏四月乙酉百姓の清良と云り
仲たのしり人より大良武内宿禰と撰業へ遣しけふ
舎弟身美内宿禰奏申さくは元武内常
子天下と望む心は今にほくはまゝく三韓とま
き集くらしりしは謀叛と企と天の使と遣し
て大良と傳せしり大良は二心行くと志を以
て是の儀の祖根子と云人よりあり其形大良はね
似たり大良は詔云願ひ朝にまゝく其罪なりと事と
新し大良は家大臣はつりて傳せしむとて即す
こ外て自死す大良はそり海路より朝廷に参り
大良は天の兄弟三人は推同して大良の事各中と
知るくこりしは寵へ給りしは漢紀信林は軍艦を
賜はぬしりし時高祖よりつりて草車よりは
し志はしる異他人は是なりし時随く成りたり
情はぬわたりし一房あり連枝の姫をまゝく
たり失りしなりけりしと志りし時ハ胡紙と其
弟をり志る人府ハ骨肉に離散なりしと事

は是通ひて思合せり又陳思王七步の詩云

煮豆ニルニ燃其シ其シ 豆在ハ釜中ニ泣ク

卒ハ是レ同根ニ生ス 相煮ル何レ太急ナリ

このうゝとありぬをくゝと見ゆ人清浦朝臣の籍
とありしとありぬをくゝと見ゆ人清浦朝臣の籍

梅花の如く根より分れぬくゝと見ゆ人清浦朝臣の籍

武内大臣八仁德應神中天智五十八年神龜景行天智よ

以上六代朝臣使く元年二百八十二在官二百早

甲午也

① 活和天智の事云々ありぬくかりきけり附大納言伴

善男卿少八賤なりく相思はりけり大長と功なり

心付より其附乃大臣位美濃守四子孫なりけりけりをりて此

人と答よりりて其代は多かりんとくりりて

子息を其の仇は命して貞觀八年閏三月十日自刺應

天門と焼く信公大臣の志りて也答重きゆと諫ア

同死罪は行くなりけりけり忠仁公良房のりりありて

孫よりりて其儀はとまりけりけり大長は及らす

よりりぬきとまりけりけり月比とく善男乃

造意は多しは信公勅勅とゆり善男乃伊豆國

を流してつら子なりとて入被配流しけり

此も兄弟の誅討にわづねしことなるに因りては

後生准子

河内守頼信子

後冷泉院河内隆興も源頼義鎮守府の將軍と氣

幸子の頼内子

て貞任宗任と責けりて水原の来りて底を合戦しつ

く多きりけりて天喜五年十一月十日に二百余騎の勢を

發しておとひしせけりて貞任河内子余騎の勢を集

りて志々と金為行の河内撫綱もあつて是をよせりて

やう河内子ありていへけりては方の共う金つん

あつてけり上郷もさうもつてつらつら將軍いさ

大に破れしと死有勢をさうす兵に方子散満しては

不可つては六條長男義家修理少進藤原系道治

系貞直後原孝範大宅光任後原則明也貞任の軍是とて

て責むるをまうす事一前従を義家防戦改め非

若サの齡して大なる矢を射り其矢の中をらよの必

をいれあさす事一重よりこり軍とけ

破てかこの中をぬ中へ入事なく也のかむりこの

とくし七月を合らよのね一貞任是を感して八幡倉

をぬけく此處に戦り貞任の軍僅に二百余騎に成

ぬ程將軍とつこみく矢とつす事一のまけりぬ

此相戦のる將軍改めせりて殆どぬれりこり

もれ義家先仁五六騎して命をすては河内と

ころり貞任を憐す引退く家も依伯經範と云者もけ
て軍破れくは將軍の行方と不知逃らるるも先共
たよ將軍も之を同貞任未よかこましくも道か
云經範も作く悲し早將軍ははるく亦余年とを
せり後命と多時よのこして我独りくへくもて敵の
方へけ入れ帛赤た三人同相隨くかけ入ぬくの敵と亦
ぬく逐よ亦おぬ者系頼と云者も將軍のり方と不
知疑く敵の中へけして死る中をぬくは骨とらり
りしと思よ男の似よて敵の陣へいしと忽ち頸刺て
行りよ將軍も行わひきりしつぬひ且悲し將軍志

くろくも夜付て涙と涙お家つそりしと人忠節
の志を感よ堪きり昔後漢の光武皇澤山の中よんそ
玉^{ニク}舞^ウ軍よおこまれせりけり方けりて高岸よ
つむあくきりめとを道きけるのよあけり其成
つありまきり士率^{ニク}是を名^{ニク}敵のあり
うされ流ぬる事をせりもて名心よんもまぬ
アけりよあつた王の兄子南陽よ何そよ好もて
とを然るんと云きり是を思よは頼りお家もた
すしりといふ人忠節父子たよ名疑ぬる由と思ふ又
きりひしねぬれは理と云へしすくぬる振舞

と思ふは焚會の鴻門は入りしりしをゆるく預讓り指
下は伺しりも懃也其勢すくけりしりて貞
任を打切りけりしりよお羽國山北任人清原武烈
一家の宗と引具して千人二万余騎の兵と康平五
年七月將軍よ加つてよありしりて同九月十七日とて
厨川の柵として貞任逐ようてなけり其時合弟重
任と男千世童子より始り貞任と同類と切ちり
き者八人歩兵救ふ不致の宗任家任則任亦宗徒
の宗十九人十余日とて降人よまわり此中小
こしよと哀びり事ハ則任の妻女館の破る時男よ死て

云君改よ死とす我人よしく何ふせんとして三子成子をいひ
て高岸より成と投てぬぬ人の者涙を流りり頼
義の家赤忠を天朝よりつてを遠通よあけりその
後年へく白河院山時任若門則明の老妻をとりけ
りをとらかしてお治せさせりんらうよ先り云故頼義朝
臣の鎮守府とまきく秋田城へ付侍時より言うり侍よ
軍の初のとたてし間法皇のといはれぬとていへ事跡幽
玄也殘事とてとありぬらうとて侍衣を給り侍
りし柞松を貞事と云事ハまきく人のよあはぬ事
貞心あるよありしり雪相おのしりしりしりしり

死守保りたる是を貞心まことこころと云ふ也勃松八年の寒は
わづらひ忠臣の國のわづらひは人の清安行の西征の威
よ書れ其心也菅家太宰府よ思はるけり此

こら吹の思をせよ梅花ありしわづらひとて書ねり
しよ北条梅の枝ありしをわづらひとて書ねり
坊門西洞院西北後中略南坊門西洞院東六町
梅殿の梅ありし枝を系てせ付よるりわづらひ時此梅あり
向く

此の花ありしをわづらひとて書ねり
しりしをわづらひしこの木

先人於故宅羅發於四年廉廉猶棲スミ不有花主獨有花天

こころをわづらひとて書ねり
けり好文本をわづらひとて書ねり
目よ千万里の山海と云ふと花系るなりわづらひあり
けりし理也此梅とて貞本とて書ねり忠孝一乃事わづらひ
し孝子の振舞此の心はわづらひ

董永の成りしと書ねり志郭巨の子と理む全ねり也この
頭三の唐の事なり孝子傳蒙求りしよと云ふせりふ
よりしてはるへ口付しり物わづらひしよと云ふ書の小り

不及家朝のり常より人の口よある外つあ糸可申
首元正天皇御時長濃國よ貪く賤く男をけり老
そら父を捕り此男山の草木とめて其血と
て父を煮ひそり此父胡々あつらよ酒を煮
けり依り男わりのことと云物を腰よ付て酒を
沽家よりて常よ是をんて父を煮ふ武時山よ入
て藪とそんとするよ昔原も石よりてうら
よせうらひきりけり酒の香もあれ思ひすよあ
ふとて其あつらよとらよ石中より水流を事よ其
酒よ酒とけり酒とけり酒とけり酒とけり酒とけり

是して其存目よ是を酒とあくまて父を煮ふ時
帝此事と云りて雲屯三年九月よ其亦へ行幸
るる清原へそり是則至孝の故よ天神地祇憐
て其徳を成す感せよ給てねよ美濃守よりこれ
より其酒のあふとハ養老の滝とて申一旦依り同
十月よ年号と養老と改めし進けり

● 後三条内子内母内納公成女 白川院内時天下よ殺せと杜宗削せし事よりこれ

國去よ奥鳥類繩よそり其は貪く僧の老より
母を持しそら其母奥りあれハ物をくりけりた
まく求めし食おしん守してて教とつら

は老の力跡をくわして今なきものじ方おくみくまり僧
のけしんくもる来世たぬくく思おもわしてつやく奥と
るくくしおれた自覺川を子修く衣よきまきくき
して奥をさうめひくくらのさき練と二おておこ
つたり禁割の重きこはるれ官人は是をさうめぬ
て院はふへてまぬ先子細と同か殺し禁割世よ
りくおれくくその中とさくく人況マ法師
の水くくして其衣をきぬくは犯をさすりくく
啓道くおれくく作合くくくに僧涙とくおして
申極天下は禁割の重きゆくと皆承志不也此割

わくた法師の成りして此振舞不可も但家老より母と
てはう只家一人の外さのそたら人おれ終きけ似お
とくくして親々の食キるくすくくす家まきく貪家
て感るもれ心のくくは訪は力堪す中くも奥あり
まの物をくくす此一天の割はくくわて奥馬の類おこ
る力のかすくくはよりわくくは是をくくすけくく
心のくく本わくくはくくは奥取御もくくねた思
のあやうくは河のくくはは能くも罪と行りく半来
れ内は竹くく不可通くくす但此取取の奥くく放り
た難く成のくくものをゆりくくはらんを母の汗を

つらねくこと一をあらわすり味をすしめて心せしむ
け給をまそつしよるおれんとすすんをす人
海をわくす院因らて養老の志あらうぬと衣感
せを給く給く物た馬車よつて給名てゆらん
よりより事あら六程戸へき由を伴合りぬ
●武則公相と云随成父子よりりた也馬場のせり
らよりり射きうしてふは勅當して賜てすけ
ろよ事もおくしてうらんもれいり人いよ事
あかかくうううと向もれいり退るる養老
の父あんとてすれおれいり給くも便也い

もれい心ひのりおれりううと申もれい世人の
孝子なりとて世の習えあとのあかり智徳太子用明
の杖の下よとてうを給けりと思入りけりや孔子身
子よ曾参と云けり父のつりておもるは述すりて
きとけりけり孔子守給くりおらんおれり父の思
名をうとん事ゆいり不孝也と禁め給もり是
理也親の所よよりへきとわぬら父母ははつべき道
あく孝經よとては文は九二章と分立する終の
後六喪親章と名く喪礼の儀式して注せり是
んるへし中にも智教よの孝養父母奉事仲長を

りて付生ののりしり成鮮髪膚と父母は受けるを
の始りし恩徳の家高りり事父母は父母は父のり
人の上は忠貞の誠とくく下は憐愍の思を原し父母親
類は孝行の心と宗と一友はあそそ人々を
とあす仁義礼智信の五常と不亂と徳とす人
又夫婦の中とは忠臣の道とくく夫は能男は
志とす人一人は賢女は柔よくなり日つ
こ随ふのよあすを治すても貞女は月をな
め長く一子孫の内は用ゐる類わきこすの又世一
りしり同道は付し類多し

⑤ 唐は馬元正妻尹氏男りり成て後心死すす云戚と云め
よろしきそりり絶た歎のあまらし三年までおいころり
かし今の男あつたはくは送り送るそり隠中妻同
く男はあつたは親のいさめをす中入すを更人は
みん事を心うしと思く自成とわははりし
身死りし隠中墓の側は埋めとを云けり加々屋舞
帝后妃皇英二人は湘水の底はあつた石李綸婦女
保珠は忽し高樓のりしは成と投し

⑥ 昔夫婦相思く任りり史軍は随く遠くりし其
妻はさき子を具して武昌の山の山まて送る男は

初を凡く悲ひまじり男海難すわりの甚いことありて
まねく死ぬるは化して存たれるは其染入の子を
おのろくまろくろく依りけし山と夢まじりなけ共
石を踏みまをり妻の幽明跡よりかきそりまじり
云地流るまじりの姫君男のサおの運よりんとおきて
うろくしと侍していあら此心也

キナクつてまじりて人を待はるはまをりまじり果てま
家國の松浦佐夜姫と云へ大伴猿丸九郎事也男帝の
侍使は唐へ流るまじりて舟をまじりけり時吉別を
惜くまじりて山の幸よりまじりて遠まじりなれりまじり

て悲の堪ずして領巾とあきて招く人海をまじりけり
より此山を領巾麾と云へ此山は肥前國まじり松浦佐夜
まじりてまじりまじりて姫のおれりまじりて此山を松
浦と云へ残ると松浦と云へ也万葉集也

遠い人松浦はよ姫妻と云へまじりまじりまじり
すくまじりまじりまじりて佛神まじりて信をまじりまじり
まじり不信の者まじりて其缺まじりてまじりまじり

◎延喜八年八月廿六日自あかり唱切まじりまじりけり時清
涼殿の坤の板の上まじり神火あまてりまじりまじり大納言
清貴の上の衣まじり火付て跡まじりまじりまじりた清す

右中弁希世胡長良やけて相のりきき事外此二人
ハよのつぬま佛法と誓しけりぬ此大よあつり中貞
信公流りぬ多り是希世胡長良と取て白ひもんと立
あまけりたれぬ美奴の忠直ハ火くやけく死亡し紀
落連ハはのり咽く同絶す是よりありあつたのり
公おりえんを佛法と信しより程の人ハ喜石あり
あつり中弁ありりより貞信公時平の弟とてお
りもんと兄も同意しぬす天祚の正幸と歎ぬ
より共れりやあつたよぬたぬの類からせより
けりあつたよりや正信二年二月四日託宣の記の

中よの家西行の附故貞信公右大弁とて少く家遠り
あつたよえの謀計も同をよりきよよ清良の物を
通りぬき懇懇と信記は家の子孫ハ捕政絶す
あつり胡家よとより為家志ありあつた何ぞ守護せ
りしんやとのりぬより實は時平公以下同意の光
輝定國菅根祖と共未絶てるなり時平公ハ延喜九
年四月九日廿九よりて薨り娘の女侍共ハ孫東宮
共ハ一男八条右大弁保忠ハ養平六年十月十四日
卒六より共ハ三男中院中納言敦忠ハ天慶六
年三月七日卒八より共ハ二男富由路右大弁

志のこも深く天神は恐る長く毎来庭子もく
天神と稱して事はおおく侯約を用給り春
として六年おつゝ九赤題として具し給り
後車汁ともある材料のついでかきよ取す
て押給る日隠のりし小柄お抄と具して水と
入るく四年をすすりて其故くもるも右大臣
た大納言二位とく康保二年四月廿四日と六十
八とて大納言けり三位と八位は贈らるる但枝家
の人おしえ佛道といふる公達い幸おりり時平
いすくかへんかへておつゝけりや此の間の國約の
て力なりこりきり

大納言の室はと系棟梁女也けりともありて家柄のあ
り終まり教志の母也國經歌給られた世のよきは
て力なりこりきり
思ひあつたころのころはついでにわが孫にともありて
此の國經の其はとて給けりともたし集よる人
すし入る共未^{帝お好れは形も善世王孫}仇貞文の妻中院侍従とては
孫もあり貞文清りといふりよはすも成よるんかの
女の時も老のやいめんりあり中院の西對はあそん
けりといふる母よるもあつたてにけり

昔はついでにそのあつたてにけり

うつとを推定げん定りては、
元攘矣んりりしと信力よるるに、
指すりりて其証形るる也

③ 近八平家の侍子那波三郎經房と云者福永より長
よりけり道とて神よけしと云りけりよハ女藤本司能
盛哉中本司威後回すきりた二人ハ事おりけり
威後ハ馬汁を損しよりけり經房より佛鉢のめ
方ハ不知り太方ぬとてさまぢけりけり
そりけり事しありけり

二桑園白教通由女後冷泉女也

④ 小野宮右宮二桑東洞院の正所とて寂勝と經をわすれ

けりわすりて神めらて西殿の内へより宮に經を
り石路けりしとせらるる事とありけり
のふりやけり文字ハ一とやけり
ちりきりけりたハこれよりあれも
ありけり

⑤ 元依國胤同寺と云山寺とて件住僧と高國の正徳相
かしてけりてと云大般若書寫の大願とて汝助成結縁
す魚一用達ハ一とありけり
わすりてと現るる年へより其後令用達をいは

すりよらぬ此僧善縁のありしをばとほく自力を
励みし漸くよき切と成つしけるを仍件の在徳に
師とあまて久用違はばとほく一訛へくせさる
中多くゆり今よらぬくハ先徳を遜るべしと云
ふハ願はば信書とよのり時假て用を来しては
とよて志慮宜く成りて同く集道信位と相
す不よとくくくくくくくくくくくくくくくく
の信の倡くくくくくくくくくくくくくくくく

檀那不信故断紙還奉^ル本土^ニ經師有信故文字留^ル靈山
拈案信留土凡息
右兵衛督敏行在降^ルとて人の能く經とあき^ル書

るを清書の抄帛と書けりあつて文字とわくハか
とて断帛とハ帛大宮とわくあり文字と成
於るハ水黒大河と成く敏行のよらぬのあつと成け
りしとくくくくくくくくくくくくくくくく
去るハけりくくくくくくくくくくくくくくく
とわくわくくくくくくくくくくくくくくく
字とて不書しとてよきより其子遺教と云者あり
述てしとくくくくくくくくくくくくくくく
出家佛法の方の抄りくくくくくくくくくく
りわくくくくくくくくくくくくくくくく

きりきり遺龍の遺命は深く佛法を肯よめた
國王の勅書よりして心明す法花經の外領二十二字と書簡
は其字六十に所の佛と成く馬龍の落平の地獄より
て若患と救らぬより又得道の中遺龍夢の若と
見よりきり是と息よハ不信石津の心わたりた一字は
と活くむよは世のそのと教育よきよとそそめぬ
しりぬよよ一節は思定よ

但馬守有頼男の落後
④西宮田乃大在衡の少見法は人小福とてり事ハ多
と帝の同知りの事をハわたりすぬよよとん
たり思へる道は車は文一をよけてんよきり回

始まると日人万不の文のよ也是よ一りて帝は少く女学
あり中つやや一あり又朝の格勅余人小福より凡
かひりけぬぬ日わりきりた燕門陣の若よとくよと
在衡わたりた今日よ集わよとてよ集よよと不終よあ
よよ義よと深流よとてよよとてりきり時
人感よわとけり此人の若くより鞍馬と信よ
て集よとあり文章生の時わ寺よ奉訪よと云面の赤
の圓よとて礼よわす万十三日歳の童信よよとく
縁をまよす七友よとりと思らよん共此よ善量のお
りよ終よとんよとてよとて人月よか

百廿年と云ふもみづの附此書より廿九在衡弁田畧の思を
 ぬけりけり昔もききしは神うらまはしりてさるは
 ともありつづる書天壽のしく世宗一しては帳の尺
 十りかきよく云官は右大臣歳七十二と云きはは承
 進心のみ〜右大臣七十三の年は寺も清てして云
 代日右大臣七十二と云現と蒙〜と改り世宗と
 是沙門又夢中〜の好く官は右大臣と云きはは
 しくもよも人よ勝る〜とわてあよいつら命り
 くもより〜七十七也と云〜して此年失好もより

冥顯子付て志は深〜さるは其家不及と云又息小
 めそ〜と成る〜威徳よけり其は鞍馬の正面のま
 同を進士の用と名付〜と昔明王徳王の善政と
 行の好は世よ今競まらる天実と〜と末〜と云
 かりき徳の徳〜仁ハ百禍と陳くわ〜り
 佛天〜と信力と威徳の也攝廣相書

殷宗懿徳^其殊耳之思自銷^其宗景善言守心^其疾我愛
 慮直と云ハハのつら事と云り〜ゆ〜と云〜
 万事を忘ら〜り〜と好す契れ事と云改お
 とう〜やます喜と云欺と云悔と云す〜直〜

とんまふ〜してまふかふらひしや日月の也一よりそ
光をくくせす明は二人のこめは法はまけりりこそ
と申すより人子酒く〜あつておく親をもとら
す時をよひてす〜し思をわすれを
賢人と云ふ虚を〜あつくまへんは軌と尸文は直
片の振舞と書の人虚案の章〜とら〜きり人
の事わくれを得〜し人の也とわすれりれ
す〜きりものもり〜とせぬ也

叔母せむ思〜し〜し周の要をうけす〜し去齒
白りり子成王〜りの人〜しと玉〜しと〜し林虞は始
せげりといふは威云〜し〜し大史の〜し申けり孔子
飲と盗泉は水は思ひ曾参車と勝母の里はめ〜し
す〜しつらひ悪文字と付そら〜しわて不のふを〜し
程の事り是〜し〜し道を深くす〜し和信の
荀勗とハ中書一官の監令〜し〜しあれた偽〜し
易の心への〜し〜し一車はの〜し〜しきり熱てお
る〜し〜し欲す〜し〜し虚言と〜し〜しあ〜し〜し
〜し〜し直〜し〜し心〜し〜し程〜し〜しあ〜し〜し
今〜し〜し程中〜し〜し我力〜し〜し〜し〜し〜し
直あ〜し〜し〜し〜し〜し〜し〜し〜し〜し〜し

かたかりんす人よ要事よのこころけ割るも海の河は
つりて浪をぬす類らあり世路の人形は人間よまこと
るも心先立飲鬼の目には影なき物也返くも可恨
能く可思

④昔者札共王の使として抱ひもろ道は傑君と云友達
よみあそく抱ももろははは傑君を札にけりたりと望
ひきもぬるもぬれた詞もあていんたりたり季札もれを
悟くよ友人と思げり我使節は成也ゆりよまよよ
と心の中よ契て云ぬりよとすもろくゆりよよあは
傑君早くもろぬく成よぬれ心中の契約のそる

はらんこあはは持塚をぬく其剣とりやろ是ハ伝古
まもろとあは同よらりて庵者の篇よ書加紀蘇名
徳り樂の初よ

秋霜定人共札懸 剣於蒼柏之煙
曉浪一聲元礼移 棹於綠蘋之月
或人友達よた刀と約束して久く送くもろも
まはりくもあは

ひきぬもあはらた刀しもろ物をはらひのまもろ
楽天書る事よ
一嵐得仙生羽翼 衆嵐看之もろ

可憐上突猶未半 忽作鳥鳥口中食
是地と云くやじきし心と云く又其を悦たよ保くせらる
例一證是也

昔唐は塞を翦と云者も賢く行くと馬と持てり
是を人よしわいあつらひつて世を治る便しけり
はと云馬といふ志をりけんいつらそてなく失よあ
つすはとら人の心り詠くらんとて訪ひあれは不
悔と云りてつめもあふりけりあやと云
あかしくは此馬同まらり馬を多くあてまつよけら
と云わくは日本をまらんやうと云くは馬を云くは

た又不悦と云く是をしかうくまみあわくて此馬あ
まを飼てましくは仕あらよは翁の子今む来り馬家
てあくとこの肘をつき向りよそり中へ人目を驚かし
向も不悦と云くは氣色し不替つれりく同と云
よつと云くは其は倭國は軍あそりて兵をあつめ
所まけりよ國中はくわつ者残けりあはく皆死ぬ此
翁の子と云わらよしりてゆれよあれはこそはあれ
た今いましりけり是賢きあはよは他人をり今
もよま人の毎事うらまはくは深くぬ此翁の心
よ通つらわくはと人ある内外典よと云くはあみか

人の心をもつてもね也昔より一も二もをいそいで思
きりしむいそいで思きりしむすも也故新典の
老人の雲南の軍と道きりけり八自碎月と
わげの故也此の自統の事也いそいで思きりしむ事也
④前中書王亮表賊喪馬老妾倚伏於秋草夢蝶之
公但是非能春藜とくまきりしむ此事元或文云趙
柔と云人踏よあつて人の残せり不の金珠一つあ
こをゆきり其むいそいで思きりしむ事也
主とよい出りしむせきりしむ人足と守て大少
くまきりしむ又云楊震東萊の大守りて昌也

云不とさけりよま不の月古意あつて金と思
ひやり震よよふ震う云天と知地と知家と知とて
逐うけすは知を和は是也愚かむ顔ハ人の人ん
らりと憚つて天のわん知事と和也いそいで思
きりしむ心也菊散一聚金と云題とて紀納言作
廬士路過^{不拾}道家標裏誤應燒
釋尊者阿難と付のそかりしむ事也いそいで思
きりしむ阿難是を思く毒蛇との指し佛き
大毒蛇と作しむ事也いそいで思きりしむ人此
金とそれのしけりあつて責と象て文よ煩ハ

より揚震るに知を知ら此意しや

大納言俊明字隆國三男の偉と造りゆく中を中て奥列の

清衡字清子の頼も金とまけりよる取して返すつ

けり人其在を問われ清衡字清子の地を多く押領ふ

て兵と謀叛と可殺者也其時ハ追討使とつらん事

て定申成也依く是と取ぬの終つて

小野系後孫清慎孫右大臣とて世ハ賢人右府とり若くより思ひん

けり成は務きん女能成もれ何事も付て其証

形造りて誠賢人と名をけり事とて此

く二節は唐源系の振舞とて一終けりか

人更なる行りて湖を頼もる程ありて家と

造て後徒せしむけり和火所おち火のさすものあり

走りぬりけりやとて消さりけりて入り見給あり

はとよやくとゆり付て深きよりえあふと人あ見え

てよりけりて割てけりて入り火大よけりける時節

斗と取て車よせよとてお給よけりて柳おをよぬあり

事なり是より自賢者の名顯く帝より給よるて

事あり感しとておされありのりよ付てハ

家二やん半は敷の成よぬとあしりけり

或人ば其故を尋ねるともれいりておち走りて火の

かゝるはるはるのありさうもあつたはるはるの授かひ
也人カトて是をまゐりて是より大なる成のち事
おく會へ何よりして強よ家アを情じよきんを
いふ進けり其は事よあわくおの振舞はるりけ
まの進よ賢人といふんてやまのきりけりまよま
鬼神のふ愛あつてもんがえんけりや好正とよふ
血五十四而精誠通ス於神明文選と曹大家の東征賦よ書くと忠念を
一五十四進めりていふて賢一りんをいふと
すもよあつたはるはるの道ひとて人幸と
かゝるはるはるの授かひとて賢人の一節のちかゝるはるはる

定活抄

○定活抄 國融天の宮に於て神中におもて殿よはひおけりよ式部

藤人若糸貞高と云ふ人太盤よ付てつらつた死一りけり
頭よりして奉目し部をらるるおまをせんけり
何方よりおまをらるるおまの東陳より出さるる作
らんおりの藤人若糸瀧口おの西倉女官を殿目下
教たよおまをらるるおまの老た是をらんを東陳へ競
ふ集りてはるはるの殿よの事おの西陳よりあせり
おの川邊より西よりかゝるおのらんおのりて陳の
糸へおのりて三位より迎へぬて多しおのりておのり

して改中お夢は益人肉を奉おぬ此の恥とく
を給ふらふも志れし一東よりおまのいふ事
人の心くおまの志をすりて信く候とみく
なりと信く此殿と聲は信て給ふ一入られける何願詠と
下をえらふくともおの厨子はやうんせりけるゆ
しきしと川おおよこと

信長

僧佛師良秀と云僧と云り家は隣りり火おぬ
を一おれてくれは火路へおより人のおす佛とか
志あり又おしおあつぬ妻子おもはぬくともあり
らんをともす下火計只一人おきると事一して

む人のつらまはつと云り火くや家まよりつりて煙をくめ
けりともくたまさりけおあつとせりあぬは志あるま
能ひもれたるころけりつらまはつと云りおまは家
の傍ともくおうなつと云く一と何くおのくありん
えつら不得は年はよやく書けるおゆと云何訪ひ其方看ん
こはつと云くしていあさまきまらつおと物のつと給くうと
いふ何栄物のつと給き一り年は不動尊の火夫とあり
書ける也くやん取をり是こく人の不得は此道と云く
世よあらん佛と云りおまは去年とせまらつと云子の家にお
来つと云りおとと云く一と何くおのくおの世給ひ

物を傍人へとてあつた思ひくまらしけりともなほよや良
夫のよらりも動として人々もてあつりけりなをこそま
く守りて大右府の振舞ふは似たり

④ 横川惠心僧都の妹女養父上よりとて孫盗入くると程
の物具皆取ておもん八反上ハ紙袋と云物汁川までお
取よきりけりは姉反のりとも小反上とてとるあか
走つてあつて人々小袖を二おとせりけりな是れ
とくゆるわたりとて思ひつら主の云ゆわおなハらつて
はの家地とて思ひつら主の云ゆわおなハらつて
きこひもきこふも思ひつら主の云ゆわおなハらつて

へともおれにけりの方へまのりおとて思ひつら主の云ゆわ
おとされよけりな思ひつら主の云ゆわおなハらつて
てあつてとるあか走つてあつて人々小袖を二おとせり
物を内かくし思ひつら主の云ゆわおなハらつて

惠心僧都金峯山よりとて巫女とておとされ共一人の
ま向はして心中の不願とてとるあれは并たも十方億の
國ハ海山へとてとるあれとて思ひつら主の云ゆわおなハらつて
りつらとてとるあれとて思ひつら主の云ゆわおなハらつて

給ぬ

光明山と云山寺は老尼とありのりつらとて思ひつら主の云ゆわおなハらつて

わらうし質をりし心と思へるうらむる事なく淨ら
ゆる事ありしとてさうしとて作ししけり故に維摩の淨は
質を是と淨ら也と後法は淨は六条和質を者若
質を是と柔物とてけり心うらむる人者佛を人
まじし由お量るのいんやとわらふ偈のわらふ三所せとわ
らふや又情大菩薩前室の者のひまわらふとて物をせらふ
あらうまはるいんたきくまはるいんの心と家なきはる
とてせらふらふとわらふとてまはるいんは二世の心とてげん
事ありし心はよくとく合ふす

第七可傳思三事

或人云人の貴賤といふす世の心につくし若くしわらふは
て私をうり見家をわらふ一収とて三の道をよく集めて
何事よ付しても収を安くせす其表の業と宗として
其方の言を相とけりいへ一思うわら類の親のあまら
まの心はしりすは随てつたをわらうらんとすと思
てかりたりし事の中も并へぬ也又親とおと入ておと
は答やいす人後の毒をうりす事よと答へたりし
事よも便りありせぬとのりかへるのわらうら
人の能くまらわらふはわらうらとてわらうらと
とてわらうらもわらうらとてわらうらとてわらうらと

おろすことの海に仙人の下界の人よ付く水にの浦傳
か子と遊業へりきりけむ昔語といよのつ孫の事と
思ひきりや妹は主属すりいん也顔田ハ賢者おぼし
不幸りしてくるやく死し盗賊賊徒りまとも事とを
とけりハ理との外おぼしハ流りんと例と伝す人き
天書始す

去者道遠來者死乃知禍福不天為

是ハ秦ハ李胡等ハ心ときくハ漢の周公等ハ
まのをほめころ古調四韻の月の落句也わんハ付く
も三界唯一心ハ外ハ別法わりけりとも覺也亦天

又天珠の化或ハ六ハハ信世も人但りもこころあむむ報と
いふくハ輕い來て聞いんとおとす人ハすす万子付てよ
く慮とめりすすも也

辛 河内國金剛寺とくハ山寺ハ修りけり僧のねん人を食

も人ハ食穀とくつ孫たろくハ食ハる世ハ
仙人たわりてとんわりくハ人ハけりをゆて木の葉と
くハ滅らるハ世もりけりハの類ハハのそとや
らくハ三年ハ成よけりハ成よめりハ成ら
ハハ弟子たしハハ仙人ハ成らんすも也とつねに
とくハ内ハと成をむりハハハハハハハ改ま

てよりかんとて坊も何れも予も予も分ち譲てよりか
く他衣をまうり金一とてか形腰も物をせしめかきとあま
はあ成はは是より外へ入つておわしとて年は秘蔵
ましく相せりあか水懸らりる腰も付て己はあまらり
中子同明名抄惜悲らゆ及人を道市の如くは集くと
仙は會方人入んとてつひそりけり此僧行ふのそりふ
こいあらる歳の上よ會ぬなほまをを會らしおんとあへ
九道く先遊て事の極人くまをせしんをば教ら
よより下よせせりあか松の枝よめを遊人とて若より
けよりりせり松の上はあふはまもあるとけけはまはあ

く目より一長なうあきつるまははくん心は隠
きりあもあ思ひしりもあまなくわくまはく
てよりりよあははあらして若人あ入ぬくあま
しんあまは是かの事あまはあらあはん定てあま
らんすしんあかんかひまの底ら教らあよりて水飛
まはあ成しあまはあ損して只死はまぬれは弟子春
属はつて寄てつあはまをりしとて只す僅は息の奥
中もあんとましくして坊へも入けりま集れらん
ひあまらそゆりあははく此僧らまはあはあま
て痛めりまらまらあはくて弟子は極しあ

ありては右様の榮えりては命をててもみかねん
半はのりくかひのまらるゝ五穀をとりてはましくいひ
まやうぬくも命をいひもんた是の腰に折れて起ぬ
もえ白くしは右の榮えりては命をててもみかねん
まの食く弟子はゆいし譲つてはましくいひ坊も
も取返してはましくいひ命をいひもんた是の腰に折れて起ぬ
右のまも文集の相かへは丹毒の心を
期しやうとてはましくいひ命をいひもんた是の腰に折れて起ぬ
うけしとては右様の榮えりては命をててもみかねん
但唐玄宗の宮に西の母とて仙女とては命をいひもんた是の腰に折れて起ぬ

まけりては右様の榮えりては命をててもみかねん
あれはまの母とては命をいひもんた是の腰に折れて起ぬ
やとてはましくいひ命をいひもんた是の腰に折れて起ぬ
おろしやうとては命をいひもんた是の腰に折れて起ぬ
まのりりけりては命をいひもんた是の腰に折れて起ぬ

三法抄

五 延喜年中は美濃國任次のはしは千手陀羅尼の持者位
より三日月のまの母とては命をいひもんた是の腰に折れて起ぬ
る間遠近の貴賤集りては命をいひもんた是の腰に折れて起ぬ
まのりりけりては命をいひもんた是の腰に折れて起ぬ
のりりけりては命をいひもんた是の腰に折れて起ぬ

此は魔界の入りまをうへつる魚とて歸船より
其後稽く或時は詠の天女衆やしよあしく妓樂とけし
むのこゝをうへりましく此僧を迎けくまよきり人者
幾く皆奇異の思をけしそりけるはこゝは五日ましく
樵史の山を入まりまれの遠ましくまのよは敷の傳り
ま人のうへりこゝをすえけるをわやそ人よははあけり
まれのま道の後人集りましく是をかんたよ人のやまの足
りそれましくまをましくよろへま本わしく孫のむのすおろ
す者をましくののちましくりまれの法師とまのまよゆい
付まりやしくよまをましくましくあけりまろをかんたよ

此は半陀羅尼の持者也まりあましく一丸愚とて具し
ありのあましくあつひまれの命ましくあひましくまろりまれのた月
ましくましくあつひあつひもれハ行住りましくましくま及ま
れは僧のすまろままはあましく天魔鬼のまありれ丸愚
あまろりあまろり上先のままはあましくおれまろるはましく此まいそ
まろろてお人の習ましくましくまろりあまろりままよはあま
ゆてあまろりまろりまましくままろりまろりてあまろりまろり
りてまろりまろりまろりまろりまろりまろりまろりまろりまろり
まろりまろりまろりまろりまろりまろりまろりまろりまろりまろり
まろりまろりまろりまろりまろりまろりまろりまろりまろりまろり
まろりまろりまろりまろりまろりまろりまろりまろりまろりまろり

まき也

後三条院十九日

⑤ 白河院の花盛雪の朝必は焚くしてしてせむせかりし

里或内言は後中よりわらうらうらとわく降るれの上達部
殿上人の先よとあつて見らるは人の志を泰りあ
らん多り口随成教季泰らん人の湯車さうせらん
く降るんもさうかりあつて教季あしや雪は水は深
く降りんを教わくかまらん湯車はねすらんとあつて
小野宮太后宮人時よりあつておれは従者と走らる湯車
すては成定くおれまうせらんすらんとあつておれん
宮の女房の中より紅うすやうとあつて三人のけり

衣せぬるよりわらうらうらとわく三回はおせし言の傳り
けり女房より入院入せたりしやう湯浴あつて
昔くおれんとおれは雪降らん人の湯車さうせらん
まうと傳りしとあつて三回はお二具つてやうせり
アはしおれは湯車あつておれは湯車さうせらん也
小野の方へおれは湯車あつておれは湯車さうせらん
まうらうらうら湯車の四方へおれは湯車さうせらん
門の糸はおれは湯車さうせらん湯車さうせらん
川の中へおれは湯車さうせらん湯車さうせらん
殿の南面はおれは湯車さうせらん湯車さうせらん

けしれはるにけりきとほはゆするねは童の七八斗あり流
まるとはきりわしきらね補は金れは血する血くこころを
の流四は浪とてきころし解とりのしきるは葉くはま
きとわいといふしついでに血ははらひをのしきとらな
るものしてたのゆは扇とてきるのよはつとまはら
けらるしとてころしとありきとらまの河に枯らる童はて
まよふしとてく又扇はしてきとく海のつらまはら
るるは車のきとらまらるるははらるるをきとくを
入るてすきとてははらるるをきとくをきとくを
まらるるはらるるはらるるのよはのめらるるは

はらるるはらるるはらるるはらるるはらるるはらるる
てまらるるはらるるはらるるはらるるはらるるはらるる
物を付らるるはらるるはらるるはらるるはらるるはらるる
は車へ乗らるるはらるるはらるるはらるるはらるるはらるる
やうにらるるはらるるはらるるはらるるはらるるはらるる
と思はるるはらるるはらるるはらるるはらるるはらるるはらるる
海よりきるはらるるはらるるはらるるはらるるはらるるはらるる
まらるるはらるるはらるるはらるるはらるるはらるるはらるる
けりよころしとてきりきり此宮の後冷泉院后大ニ条園白
のは女也入内の夜院からるるはらるるはらるるはらるるはらるる

⑤ 漢源帝の時を思善と書するは爲書する事なり野相公

よませらるるはあつたかきとてまのついでにうと云よ
まのついでにうと云よのついでにうと云よのついでにうと云よ
と作らるるはあつたかきとてまのついでにうと云よ
すまのついでにうと云よ

一徳二作不來待書暗降雨窓筒寢

こころを待て是をよみてはたせもなり

月よよとてぬかまのついでにうと云よ
とよめりたれははるるはあつたかきとてまのついでにうと云よ
むすまのついでにうと云よ

古今集より入るるはあつたかきとてまのついでにうと云よ
死し此後より作りて帝始く作らるるはあつたかきとてまのついでにうと云よ
すまのついでにうと云よ

⑥ 魯仲尼の徒と具して語ありけりは或は不恒るを
馬の頭をとりてきりて牛との語あり始まれば
思ふに各事ありけりすは顔回より始り思ふ魚の語
思ふに思ひけりてこの年の頭をとりけり

⑦ 成明親の位よりせ給りけりは成明親ありけり
給りけり中は廣情の語ありけり

云片の五代の太政大臣の嫡男也畏祖志仁公より集まると
云より信守はあそくあけて家取の況りの中を著すお
てり不感歎して悦ぶる事也何是を月らま
あり

師輔中子

○禪林寺深覺僧正治政へ清息とよむるは法苑志
やもれく信は修理して信んこりはまきりえん
と家日事作付くまで先損益をさすつりあ
つもれ僧正此中をす信くは使を著すよせせて
よやくる事ありまきりあては法の信んはせ
信んやとせしめられは使の著くは法苑の破る

月より人せしむるは千六百餘年をたてあしく
信んよもれぬくは信んやとせしめられは法苑志
年老より女房のけりありけり信んは法苑志
法苑志の信んはよとせしめられは法苑志と
の信んはよとせしめられは法苑志と
法苑志の信んはよとせしめられは法苑志と
信んはよとせしめられは法苑志と

○南都林懷僧都京人のけりまきりあては法苑志
よして詳真と求く食す家日事よとせしめられは法苑志
思よりあれよとせしめられは法苑志と

伴の夢の皇子を林懐の護法なりとて服
とすもて雜穢をかりぬすとみらばさあしく服い
と急甚よとてりまは此中を告ぐ帝の人よあすせ
急ぐ早且まあすも魚を求めくすめあいらん
る智のりく魚鳥とてりつる事有

① 仁海僧正の事とてりけりそはまはつてよのつひの
僧此まのいんす人かすす寛平信よの給つる事あら
京極源大納雅俊のりくは論と行けりは導師ゆめ
寺ノ静信法下ましく來げりともくつてすては孫の
僧共ハ僧胎よ付くくひけり時まらりけりは著者を

ぬく一そりりもり靜信我茶の言つてを人らよ著者
りりあれいふとてり著者よぬきおしておとてりぬ
つとあつて何の料よ持もりけりそと大方よとてり下
てぬきつと多りもり是ゆくの用意よあつて孫たまた
はあつてりりもり真まてりあつてはしつる賢人の
あつて他事の賢よは似す女事は思ひ給ふとてりやあり
水の對の赤よ井あり下女赤流涼水とてり付て集く
くもけり其中よ少年の女をかんく閑不よ招よせてま
つてまらり宇治殿此事を中よ給く侍不のこりよま
女とてりりく水と汲よつて伴の女よあつてはけ

て此宮の院号は何と申す可めれは白鳥門院と
申すはいつくさうなり況は昔果と云女房は此事と云
て同めれは何と云ふらんや一お方はははしてと云
いりけりな昔果の世は昔の依りてと云
まんといひ思ひくすくすり一あはれと云え
よゆはしと習ひたきらと一と感一給なり
堀川井二子

○鳥羽院は討あつて御りける夜若殿上人あまの集
ちてきまの御定りなまけん謹うしは文うく女
しと云ふひあくことし事まこと久らとて母しめ
よかんくあつていひ定人おははははははははは

らなと成り人ことのおも入使事なり一はつと云
随成たをころあを給なり其時中院おはの中お
して方ご思ひく一給花園内大臣家持殿とあ
められくる一成人を思ひ給く月夜あや一こ
そとわひひ給りか一お誦つて一は給くつ世
七重うすも一とて同色はつとわねきりける
孫くやま久人雅道朝長は太極の
白鳥一と云ふは昔はあはれくはははは
あはれ各真あつあつひの内
くせらるる又あつりけるはとく
りまはくは

たふちよこのしきれたらぬ事一申す候事と云りけ
つて花園僧尼はりたときつりく思ひれきりけふ
こゝろおぼしきをこゝろすすしあぢされもりなま
人のまげら花園のお方におぢり人そとら入まお
くの舟よりぬきのぬきおとさか人々おぼほりけ
まは僧尼男あれくにおぼし時に出よとせめおすえけるよ
其妻しよ一人おぼしりもり候事と云り一威なる
人係は音信をうよふまおぢりすあぢりていさく
いさくそとらもり是し候事と云りいさくいさく
成りん人の係はまおぢりよ付ししあぢりていさく
おぢり

のまやと東よ一人其上例の人おぢりすよ誂其夜也
あしんは遠らぬ命一是は信んりていさくあし
思んりりりていさくをいん人そとらおぢりす
うおぢりまし候事と云り一威なる人係はまおぢり
人の思ひけぬえ古の中におぢりていさくいさく
りかぬおぢりていさくをいん人そとらおぢりす
人と思んたあしりていさくをいん人そとらおぢり
心し事也は水方と云り一威なる人係はまおぢり
門院の清妹也女院よ付ましつていさくをいん人
おぢりていさくをいん人そとらおぢりす

すつしけりを院よりなされまゝにせしむるをて授
よ給ひ付しきりけり

九重よ梅ひぬる菊の花のこのまゝををりひかす
とのりけりよ心よ心をすけりしを此をを
れる人ひりけりは貫く娘の宿よ白ひこころの紅梅
のまゝとひりけりよ當のすつりきりけ
るをけりしきりけり

初めはいふこと一當のやうにさういふこと
と云ふをけりけりけりけりけりけりけりけり

④ 信濃國に梅ありて凡そ是はよふとて極防め給

の社凡の社と云ふものを多く保くことすくはれん
て百日の間尊をする事也これ其年凡静し
農業者のよふとて自らすことなる目のかん
せりて同好しきりけりてありと云ふ事能き
基云人守りて此形は是を尋よしき思と後頼
よ治るれは後頼言云下は信よ近しお娘のよ
思よふことすし使くことひきれは昔よなる
後頼はよ此事と云けり

信濃のよ本曾路の梅咲より凡のよは
む後黒こと事也五京は梅しあり

白河院の母六条頭房女
堀川院の母の

皇女の儀示とも也内侍下の清和の夜二ふいめ
所へいんまつとてまつる命と穢ま事を此二人
は作らまたりもれりあはよ引つくりふと由と家徳牙
のり徳よとてあはれは作下されり家思の
よの務とさくくわいあけてはそんまをまして徳次
とまのまらりくおかひしとていりらるる東より
さうとまらりくおかひしとていりらるる東より
とてさうとまらりくおかひしとていりらるる東より
まこと合もれり行徳實よとていりらるる東より

所系とてふらりあはれんおとふん事下よけひて
徳まらりくおかひしとていりらるる東より
かまらりくおかひしとていりらるる東より
てのもはまらりくおかひしとていりらるる東より
色をけしおまらりくおかひしとていりらるる東より
まうりきらりけりはたうとと始めまらりくおかひしとて
の徳事限りきほは弟の中をまらりくおかひしとて
事也わらりけりはたうとと始めまらりくおかひしとて
よとあはれとて二三年の面もむらりけり兄家徳
思やらりけりはたうとと始めまらりくおかひしとて

とて申す成はあれハ片行徳是申意おのりて
より日々ハ質者の修時の委ふおつらとそららの清神
系はこころのちか〜かん奉つ〜まらまらと作ら
あれハ行細兄の家思よとて此行其臺のちよとて免
きゆんそれをおまの修すらふのそととて〜入書よ
けと竹駒そとて駒のちかまひとつ〜さんとてあれハ家
徳面白くおひ〜の限と〜とてあれハ行徳修臺
志の〜とすらふのあつらとてあれハ家思あれハ修す
竹駒の〜とて〜ありけら〜とて〜とて〜とて〜と
〜と

事な〜とて〜とて〜とて〜とて〜とて〜とて〜と
〜とて〜とて〜とて〜とて〜とて〜とて〜と
〜と

袋中子

都^{都版赤子}良香策對時同頭博士ハ春隆善綱也良香ハそら
後家の侍女よ〜とて善綱ハ草葉のちとす〜とて
けらを九所〜とて見試て後三臺ハ雲浮七万里程
浪分つとて神仙策此秀句を作ま〜とてけらとて
或^{後赤子}不ハ當座和奇會〜とてけらハ落葉と〜とてけら
夷門仇基後朝長行方よ〜とて沈思の間感氣ハ〜と

袋中子

てりさうしきすて散お葉うねとる色よ詠りり顯伴
入道是を園とくくつり馬助と云者あふかお奇難か
く他欲けうよ早く此白と存く元白と来すへと教
るももま元をわまくと此をいすす技譚の時下鶉小
て先此奇をくくわくつ間金吾大よ具うしり守ま
入道ひさう小知ふと後金吾の奇備すくを関て馬
助とと来つりまよまよけれといれけきて跡不信の氣と
まりを月意まうとくくや

臣衡奇名作文府とて晩寺鐘色波水来と一句と後
合さうとけらも此解の事とと他おの事家をわ
うしりうしり人なとよおねく守合すへくと
ゆかうととあや

御中子

◎ 奇名大隅守大江仲宣子以言と誠とまゆめ時秋来か
詩境ととまま一と作らうらよ以言文筆小書と案駒
の景詞海船艤落葉色と作らうとあふといとら
小後中書目よ刀女もろあふ白字大切也といと
らよ付て白駒景紅葉色と書て秀句よ定め其
後奇名病重うりけつ時みと訪路あれハ恩同の旨
恐懐千回但白字事不可言却とそ申あふ
文時三の奴子菊是草中他とと題ととけく作えたりもれ衣

とささうつと祿くつとけらよ保胤来々くと度必何と
賀茂忠行子
まかれの不及力不待の度なれんと言けらよ折草
葉を刃えん

蘭蕙荒嵐摧^テ後 蓬萊洞月照^ス霜中

と云詩も是己の秀内也何歎然くると云間三泉此詩
と云と云世の秀逸自作の事りてと云と計ひ
えぬぬりるの事か可思ふ

三後抄

⑥ 市堂入道殿法成寺と作く世給時毎日流く世給
其比白ををせして餉を給けらるは修よ高のさるる香
門を入せおりてすよ山赤よ進くまのりりりて

はえもれい立まうとせ給くはらんすらよささる事那り
おれおれ歩く入せ給よ太山赤衣のらんとらひく川あ
まもつらつらとやうとて撮とらひくは尻をうけて
大無方安陪政村子
居給く想ひ勝明ををくく子細と作らるよ志りく
眠て思惟とくつら守とて申や君を呪咀しとらる
の厭術の和と道は撰く執とせよとんと撮へゆら
ぬりは運やむととわくしと此たはえわらうす羽也
たしとらりお神通のわわらとて其おをさしては
行すらよと云と折合く黄紙方紙ひ給りてとて十
文字よわらもさうとらとわらうしておわ解て人

よ入るる地はわくくしてまふ折として又字と云ふ意は
了悟なりて云此佛の秘めたる秘事也悟明る外意者
形一但若道摩法師不為其一人を志願して
ふとら紙をわて書の形と云ふもく呪と云ふもく形
けわくろよ白鷺と成く南と河と云ひ此書の落為
らん不を厭佛此位不と可志と云ふれ以下約は白鳥
のり方以守りて付てりるる糸坊門万里小踏河
系院の古より折戸の門は落れ仍披して束る不も老
僧一人を昂擲ありて流を同りて道摩法師川の右府
語とて術と云ふと云す中りあれ九罪をいりまじと本國

播広を追つたす但わくく此術不致申折を被
石是運の所と云ふの賢くありますよよわく
此那をのれをせ給よらり

老中將の意
① 隆禪律師按察大納言隆平此法師道尊師とて坊

よわつてさるる兼后一人を多く大和國の人被りるる日
言事と云ふ又食物と云ふと兼是よふらん食物あて
さいふと云ふあれハ食物と云ふを多くやと云ふあり兼小
入て門を叩く者あり使廢使也と云ふ其反おひく
盜犯の如きはわくくもさる也ゆりおす形と云ふゆめ
是よよわくくは后を志くるとして相侍程よ兼らるる

判官及とら者事多く又門を叩て此屋と請そらんや
すううして入すく陸禪自討面してそりこり
判官や名のり者陸禪をうへく刀をぬきく脇
よりあてて汝も動もさう六殺せん坊中の人色
どおするとさく其程もぬるらり念ねとてさうあけ
て資財雜物若干運取て馬十余丈も負をく左公
も陸禪をも馬よのせく西栗田山へおくりしてさ
ゆるすゆくと者云よりけ春莊妻玉子帝高漸離
もろく死きて劍よのせりけり燕の國乃高よもあ
て自出お給へる也陸禪云縁の屋と憐よ慈悲の
心とえしてのり同よあひあかりとあさきもあれ此亦の
事とて徳心ゆき也

攝津國兒屋寺と云ふ寺千斗カラ法師の二人女
て禪つき堂のそこの住持の家のをけり高りつて
さくちるとよあわ二三日とあれた外へてゆくとあれん
らの住持あやしていつちか人のつらへりそと聞れ
ん攝人の法師とやゆつていつくへまうら魚一そと
思定うら事とけりもそひ男播八圓志うくと
云ふよひう世中も住一あさす田地不願わしてあま
そとあさくひう妻とてひ女の心と人あさうとあよらそ

さくくも見えすい方うれおていせで然らる是を
持たしを色にしましむせうくと云此信持はしと
あんと思ふに云々もろはあは十日たうりふく此法
仰お死よすすくもてをたれいあふまーと思ふ
中ふれあうーけは六うー那ー法仰らうらまてさ
中とけうーつらよと法信ーあいらふあは結成雲お
了駕帽子さうら男の徒者二三人計具ーうらか
あふまう此寺より考らる法仰あうらあふ事
やうと云ふれはかく持持の信あうらあふと法仰の
日來るつう此曉死く所らと云ふ此男ーりてお

忍て云や此法仰い家父よとい親那う老らうみと
あふまうと云ふは是よと死らうり親人あふ養ふ
まき成すともいふあは心のまーあはまうりあこ
うらういふ思儀の死してはとい云はあらあういふ
葬送はいーいとおてらぬう方は成く乗馬者
と始く四五十人計具あうひーあきうれ共寺中
此死人といふたれ坊たをうー人ーあぬあふ
と云此僧の抱よういのまうかていぬと思ふらま
ゆーこれいあううのあふまうり石目漢法と思ふ
葬送のまうらあふいふらうらうらうて教

よおしおわくくもやあつらよきりゆよひのこけけお
きりたりはね系よとて今佛よとて其あまされ
よおひをとりくとして死入と理むゆを志しりけり
おしよきりもあつち也

幸 中はよろしき人のあまを禪師の君をきり学同行を
おせてゆいけくさる月よよさうおしおええ人もあ
よあつちとて師のしりもあつち常よ善信て日々乳母
もあまれのすいしきしりてしりあつち人もあつち
乃まの目おわけらめく娘よとよわく師のりてき
人のしりをうりくむいせしてすいけらりしき事ハ

おあれたあつち常よ善信あれたら付つちあつち
あつちのあつち中おあつちく中ての中よわ系への
かともよあつちもあつちあつちの系中れよあつちあつち
よ事よとて大幸おわけら月よよさう年のとてよ
よ成おまの此禪師のり人もあつち何とあつちあつち
あつちのあつちあつちあつちのあつちあつちあつち
あつち侍のあつち入る此禪師の君をるく人もあつち
あつちあつちあつちの縁のりつちあつちあつちあつち
あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

いつを侍大のり成りて侍れははるむ後の事おを
しつらうへおへはり年あつらんおははるおとらうを
も独りて思ふはつらう百年はあつらんおとらうを
しつらうへおへはり年あつらんおははるおとらうを
も独りて思ふはつらう百年はあつらんおとらうを
しつらうへおへはり年あつらんおははるおとらうを
も独りて思ふはつらう百年はあつらんおとらうを

侍のりおのんを十餘はまはるおとらうを
侍ゆふ人の子おりおれからつらうははるおとらうを
おとらうへおへはり年あつらんおははるおとらうを
も独りて思ふはつらう百年はあつらんおとらうを

貴舟何さまよつらうへおへはり年あつらんおははるおとらうを

しつらうへおへはり年あつらんおははるおとらうを
も独りて思ふはつらう百年はあつらんおとらうを
しつらうへおへはり年あつらんおははるおとらうを
も独りて思ふはつらう百年はあつらんおとらうを
しつらうへおへはり年あつらんおははるおとらうを
も独りて思ふはつらう百年はあつらんおとらうを
しつらうへおへはり年あつらんおははるおとらうを
も独りて思ふはつらう百年はあつらんおとらうを

帷帳の中よめらして勝車と千里の外より
出ずり車家子房よはるすも張良の巻の書ハ
立所よ師傳よ登るは是と書つてすく子房よ二
らす田草牛と放ては迴鶴つて孫一皆軍のるりり
りらと秦の惠王蜀の國をくんとく人らよ道絶て
人通ふ坑よあつすくりてとめらくく牛と作
て牛の尻よ金をましく印するよ坑の色よ送おすよ
後蜀國の人此牛とくく石牛天下り下て金と下せ
つと思つり別五人の力人として山を堀牛と川よこ
しと山平らぬら道よ成ぬ秦相張儀とつりて石
牛の尻をくく蜀國を打ぬくをり

吉 近は唐よ徽宗と申帝ありて此國の名羽院の
所ありてそあつてけり後帝の心愚くして道士の云
事よ信く佛記と失われたり其は國のこりやいば
ちへて人の心われりあつて人の都の外とてあつ
わさりよ習ひぬらと帝をくくと堂くしてわさ人と
王宮よ入て室とくりくを給ふあつて人えくす
帝よ近付よめては事と兼つてけり利よあけり法
心よをのつて倍つて都とくぬまきく鶴丹とくま
よらと金多うる小依と大金とくぬく目ちよ取てし

とらけ國がとをたねよあけは金とよら國あを
其下よ王を心そけく謀賢一あをこへ一こよりて
帝の忠愚とて敷よあけの病を極をわら其後極は
謀及とがはんと云心付よより大金へくらひん
日くらりの通ぬらうと云と是は大道とて國と廻つ
てり遠也海にけり一と云と金とてゆよは七八
日くらりよりとら道ハ近もれと虎狼多くて人不
通其道のもよ千あねるよと云不あり昔大福長者
其下よ何と金子あぬと埋りて故よ此名付をり大金の
ま印をかり商人あよくらとて謀とあつて金と

多く持てて帝よまよ一む帝是はつぬる金とて
為は人大金よりけりよ千あねるよと云不約者
長者の金を埋りてと云傳てり是よあつて試ふ
月らよ自得とりと申帝感一始て程く投求と
系ら金とて作す随作重極く申す帝あを
為す大金の王よ作ては金とや一む此王りてり
と云あらののりよ多人を計具とて金やんよ
よは一きと云と平けとけと山を切拂て大道入
と云よわ一其後くらりて大金の王謀及とて
とらけ中故病とけり帝いりて多の兵とつらす

吾道と云ふ大道より行ふ道よりくは日くより
多く都は兵少く時とくくひて大金の王兵と相具
て今作れり道よりくひては城は乱へく帝と取を
て大金へゆりて其は法國と大金は強く調物と
さけて海物を弁ぬ帝はくはくは子の世も成て
大金とくは戦もるはくはくは心くけく國よりくは
時勢場りてくはくはくはくはくはくはくはくは
くはくは大金は少取て強百九十と帝はくはくは
長安城りてくはくは大金は少くはくはくはくは
くはくは此代の帝は都はくはくはくはくはくはくは
くはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは

より三百くはくはくはくはくはくはくはくはくは
舎はくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは
くはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは
守府を宰府とくはくはくはくはくはくはくはくは
作はくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは
不あり日くはくはくはくはくはくはくはくはくは
通りぬくはくはくはくはくはくはくはくはくは
世はくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは
くはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは
胡服とくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは

山中の馬はすくなくりりしが「軽い」もあらず
王宮のまね者の礼儀はあつりてあつりくかき
ふのまねくすよたとすし、趙高の二世の代とて
りんと息立けらば床とけりし馬としてまゝて成の威
勢の程とてまゝり句踏はまのまゝりゆをゆりて會
稽れ死とすし人うまは從つてゆく、陸つちゆを人
しむとて其ゆひりそのゆりゆと誓ひし人
とくくりし思ひくもあ帝愚うふてなむの心と
悟りゆきす終はちひ終はちり人をもくくりぬ
もあつりぬひ漢家目録其まのすしゆあつす

あつりしは樂府の君をくしてくちとくしし大君
あつりしんもつりあ或はくもくり人かすさ人圃の
あつりし是のまゝりあつりんとまますとたまを終はち
まじりし此まのまゝりゆのつねはあつり人のつり
くちりしはつりあくもくりあつりし思ひゆりゆりめ
と人あつりあつりまのまゝりゆのまゝりまゝり
ゆりゆりあつりし人あつりゆりあつりゆりゆり
ゆりゆりあつりしゆりあつりまのまゝりまゝりゆりゆり
備事とてあつりゆりゆりまのまゝりまゝりゆりゆり
まのまゝりまのまゝりゆりゆりまのまゝりまのまゝり

とてしるしをまてんたつたの如くしてありしに
あをよすしすむきまきは小侍たあ夜のすまを
トよむく川とらくつめわくく朝いしなむ六やを
りもつて思ひくわねをせけりとははまらぬあ
者りまらるるものいしすまのいりらふとてハ
すりらゆとてわく思われらるる西月とて心
よとてせらわくと思ひりあねの情とてまらるる頼
ひり付もり人の心を感ずしむとては是れり又賢人の
りししとて不覚けりものありもあ

参法大をたてあ房子

⑤ 九条民部卿頼のりふあわねま君達年ハ高

て通奉目を心けねくあ者してよとてはまの奏
はねのしく入ねんかとてあすて年ハ高くとあ
何れ通奉卿のてまらるやらんあ家うらして片あ
指紙をわくとあつたやとてねく細はねの次はかり
奏しゆるへこのやとてあ年ハ高くとりては
かりの便りく作とすしとてあかとい侍とてあまふ
りせし年高くと成ねん人何れ通奉卿のり
あまの家うらしてはねのきとてまらりねく細
まねのりあ作し奏すしとてあまとい人高くと
作し思われしハあもたはあ世のあねとて此中ハ

甲かすくはよくくは侍連のたをさうやうなはくすも家
しとさうのたふと世にさう作れりしとさう侍のこ
あつたさうのたふと又すのこいふとさう侍のこ
つとさうのたふとさう侍のこいふとさう侍のこ
つとさうのたふとさう侍のこいふとさう侍のこ
つとさうのたふとさう侍のこいふとさう侍のこ
つとさうのたふとさう侍のこいふとさう侍のこ
つとさうのたふとさう侍のこいふとさう侍のこ
つとさうのたふとさう侍のこいふとさう侍のこ
つとさうのたふとさう侍のこいふとさう侍のこ
つとさうのたふとさう侍のこいふとさう侍のこ

きとさうのたふとさう侍のこいふとさう侍のこ
つとさうのたふとさう侍のこいふとさう侍のこ
つとさうのたふとさう侍のこいふとさう侍のこ
つとさうのたふとさう侍のこいふとさう侍のこ
つとさうのたふとさう侍のこいふとさう侍のこ
つとさうのたふとさう侍のこいふとさう侍のこ
つとさうのたふとさう侍のこいふとさう侍のこ
つとさうのたふとさう侍のこいふとさう侍のこ
つとさうのたふとさう侍のこいふとさう侍のこ
つとさうのたふとさう侍のこいふとさう侍のこ
つとさうのたふとさう侍のこいふとさう侍のこ

●二条二位経盛はあま梅花はさきく咲きりけり
源三位頼政はあま通るく車もめく思の外
よきてしと侍のこいふとさう侍のこ
位高きあし思つたあま侍のこいふとさう侍のこ
心持しあし思つたあま侍のこいふとさう侍のこ
よきてあし思つたあま侍のこいふとさう侍のこ

とねとらふひて常指すらと辰列らりりし時の事よ
と大集りて見ると今で驚かしくうめしーあひら
よとてくはに時らりりか形す倍々年耐のさうりま
てや一様んら形しと息と此男よとらとくわら
常のまこみぬんと類りまこころりつらと回始
つと常のわらとまこくわらとくまのさゆつらを
ゆげいふつら同らとらとゆらとらとらとらとらと
とく一人存てまこんとてまぬすえぬ事ら形と思
かこよ本の枝よ常をゆらけくもてまらわらとらと
まこらとらとらり形しこころはあくはとらとらとらと

へん昨日の作は常より形しこころのふつら形くわら
ゆらとら茶を飲ふ心うくてまこころをんけくわら
てゆらとらあんな補親と大集りらんとてあつら
や思て此男の息をんまハ形しこころとらとらとら
つとまらと茶とまこくまねとまらりんとあつらりけん
大此男のけしはあつらとらとらとらとらとらとら
まらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら
あつら

三石抄
○白河院鳥羽ありまらけ時北面の者たよ受領國
るありまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

萬類のふれこし者なりて衣冠よふなりて
其外五條の糸堅き世より各錦唐綾をまて
可く志ありけしよ其尉行遠心ありあきて
人よりの人こね月けんぬりてし清糸をとり
けり人の家へく從者をしりくやをく四所の名宗
てんくこしきくせりき期よんてしりあ
且つよやくいよふやと辰時とくと備一
くさく定年あはくすん物をしんく信
りよ門の方よ巻とあつれや一あつら物なりとい
只其物なりと思はれよ其萬類の國司のほか

くらつら物よ其後門の綿をさるし海糸射は流
物と金の文付て物なりあやしくおんまくやを
いふし其こしこつら男おんまく大さくらの
この人おひすり其糸も糸もさるりく何ん
お月えぬりす院の沙檜表の糸も一あひぬつら
目と心と及らんすといふてつふと久まんやうそ
いぬと云ふとつらふさくつけぬりといふこは
形も糸よらん糸く人糸く人糸く人目も糸
終く人糸く人糸く人糸く人糸く人目も糸
その進よ不糸とて糸は糸は糸は作下され

十日余のけり月こよ此は中よまじりてくせ給てとせ
ゆらふれいけりうに従大は愚うわをけりあのみすく
て既承のこよ不浪々くうらわりののこよ川へまこ
う人頼もててもわあまは捨一うけに付て情あわ
うは振舞へ一膳よそあやまらとせしとく一
座席の是指よ夫指ぬる人一此は火のく一
く甲人のおとくけりけり人衆とていさけり
ま又のわくまらるる一色とまこく一平うわあ
くいんすあれ程便からりのわと入せへう也清す
納言の梳草子とておはらる人のいおらこの

さうつら女房ねとあひてお治するは車の泳めり雨の
もわきまうとすまれをけりや女房はこすこの討
すしとてまよは理るるれ女房はこすこの討
他の座席よて従者のこはくこくはつと見
くら一こ事一人のこまの事ねとみえきこ余
告あせこん人又まらわらあまよわくこく
けんこくこくこくこく事也

参演女子 中野の女孫

○大宰大貳高遠の抱かつけり道は女房車へ乗
てこあつ半飼量部ののらひをけり
板車とくまをぬすあれあわ撥よ人の車なす

房連のうらみ、世清らと進りつゝ物事のなりとなく
道のきくぬきを賜ふわたりけりし大威をまげりぬ
房は車よりすやとの人おぼしむるよもさやのむきけ
ねとま車へおりてさなりやのまう不當よととて半
朝といふくせしては日の人やわたりけりし大威を
よ此女房といふくせして作らぬ人の隠すくひ
まうねと下知せし進けりすまへんはくことありと
ゆきくこと見ゆ此人のゆきくわねてねあま
の夢よ

あつた人ははるをらんまはるはるはるはるはるはる

つらうりておぼへるくはるはるはるはるはるはるはる
よる長よおぼへるはる

